

工業經理規範

大野 巖*

1. 貸借對照表及勘定科目 (1) 一般科目 (2) 製造勘定 (3) 代金内入金 (4) 經費科目
 2. 會計傳票 3. 元帳 4. 工作口別帳 5. 原價計算 6. 原價計算に於ける間接費の割賦
 (1) 賣價比例法 (2) 製作原價比例法 (3) 工賃比例分配法 (4) 賃費配分法 (5) 結言
 7. 營業總覽表 (1) 現品進度査定法 (2) 支拂勘定進度法
 8. 損益計算 (1) 計算の方針 (2) 未收入金(未拂金出金)記入法 (3) 損益計算法 (4) 計算の完結

從來の工業簿記は極めて一般的なる場合を想定して其規範の概要を示したものであるから實際の場合に當り其の事業の現況を審かにせずして其儘之を採用實施しても多くの場合所期の如き結果を収めることは困難である。所詮工業の經理制度は其事業の種類、規模の大小、運用する人の如何等に依りて適當に立案決定せらる可きものである。

又往々仕事と經理との兩方面が互に何等の理解なくして對立し、甚だしきは之が却て各其専門に分れる事の様様に考へて居る會社工場等を見受けるが、眞に著しき膠見であつて從來の經驗と觀察とによれば此様な弊害に陥り居る工場は多くは依つて生ずる經費過多に起因して其營業成績又連年不振に終始して居る事を見受ける。必ずや經理擔當者は完全に其會社の仕事を理解し簡明確切にして時機に適應すべき制度方法を以て之を處理し又直接事業の運用に當る者は常に會社の資産、損益の状態、變動等に就き充分に之を知悉したる上に於て刻々の萬事を處理裁斷す可きものであることは事業經營上必要缺く可からざる要件である。

又實際に當つては事業全體に對して數の價值論、精確性の適應限度、或は記帳經費等の事を念頭に置いて其様式を定める必要がある。多くの人手と長き時間を費せば如何様にも微細に表示することは出来るが事業の諸條件はこの出費に對して迄その結果を要求して居るや否や、寧ろ簡潔にして迅速に其大綱を掴むことを必要とするも

のに非ざるか。常に責任の衝に當るものは會社全體を通じて事務工務等一般の釣合を考慮し其精度を決定す可きである。著者同種事業を經營すること多年殊に最近數年間幾多の傍系會社に關係して何れも本様式を採用して略々所期の目的を達することを得、又近時各方面より本法を採用せんことを希望せらるゝ向續出せるを以て之を纏めて以下に記すこととする。

1. 貸借對照表及勘定科目

(1) 一般科目

會社の會計帳簿に於ける貸借對照表及其の勘定科目は第1表の如くにして貸借共合計欄は決算時に於ける元帳の各勘定科目の合計を轉記し、殘高欄には其差引殘高を轉記す。又月計の欄は最近1ヶ月間に於ける其増減を表はすものとす。本表表面の上半部即ち未拂込資本金より預金及現金に至る迄は主として資産科目を表はし、下半部資本金より假受金に至る迄は負債科目を表はし、裏面俸給以下は經費の明細を表はすものとす。

各勘定科目中未拂込資本金、土地、建物、什器及備品、機械及設備、特許權等は總括して之を生産固定設備と看做す可きものにして特に説明を要せず、通常の工業簿記と同様なり。材料及在庫品に就ては材料とは商品製作に必要な材料の一切を含むものにして本社の規定として引當材料及在庫材料の2種に分つ。引當材料とは購入の當初より受註種目に對し用途の確定し居るものにして一般的に使用するに非ざるもの、在庫材料とは買入當初に於てはその用途何れの製造勘定に使用するやの不明なる

*大野化學機械株式會社取締役社長

(4) 經費科目

營業及工場經費は其双方を合算したる經營科目にして、その合計は本期の當初より計算時に至る迄の間接經費の總額を表はし、月計は計算時最近に於ける其月額を表はす。更に其内譯表は第1表裏面の通りとす。

2, 會計傳票

様式第2表の如し。會計帳簿に記入せらるべき傳票は入金、出金、振替、倉庫出入共全部同一様式のものを用ふ。製造勘定の場合は工作口別帳に於て原價計算を明瞭ならしむるため科目欄に製造勘定——工作番號第何號として、次に第5表の原價計算書書式の第1内譯 (1)材料費、(2)外注品、(3)工賃、(4)直接雜費の何れに屬するかを明記す。代金内入金に於ても同様所屬工作番號を附記し、銀行預金に於ては預金先の銀行名を添記す。

第 2 表(1/2大)

[illegible]

3. 元 帳

製造勘定及代金内入金以外の勘定科目に於ては第3表の如き元帳様式を用ふ。此點一般簿記様式と同様なり。

4. 工作口別帳

第4表の如き様式を用ひ、仕事の各口別に付収入欄及支出欄を設け、この支出欄を更に第5表の分類に従ひ材料、外注品、工賃、直接雑費の4項に分つ。収入欄は代金内入金科目の記入にして支出欄には製造勘定を第5表原價計算書書式第1段の分類に依り記入する所にして元

第 3 表($\frac{1}{2}$ 大)

No. _____

[illegible]

第 4 表(1/2大)

工作口別帳

No. _____

[illegible]

帳簿口座中の製造勘定及代金内入金を兼ね備ふ。

5. 原價計算

本社の原價計算の分類様式は第5表の如くにして、會計傳票より工作口別帳に轉記と同時に何時にても明示せられ居る様成り居る様式にして、その收入合計は貸借對照表の代金内入金に合致し支出合計は同製造勘定に合致するものなるを以て、貸借對照表の作成と相俟つて其間

意先の口頭注文等は實質に於て確定注文と何等の相違なきを以て、正式書類の有無に拘らず之を確定したるものとして計上す。

製作進度：—— 受註後未掛のものを 0% とし完了品を 100% とす。その中間の進捗の程度の査定法に 2 種あり。

① **現品進度査定法：**——

擔當技術家の判斷により決定す。その判斷の標準は之を正確に述ぶる時は、その見積りたる豫算原價の總額を 100 とし、原價計算に於ける第 1 内譯、材料、外注品、工賃及直接雜費の 4 項がその豫定原價の内を占むる各%を出し、假に之を第 1% と名づけ仕事の準備進捗に従て更にこの各部門を 100 と見て、その中の材料の準備程度、外注品の進捗、勞務工程の進度、直接雜費の支出及豫想等がこの第 1% の中の何程の部分を完了したるやを推定算出し、この各部分の既済%を第 2% と假定す。然る時はこの第 1 及第 2% の相乗積の合計が仕事の總製作進度となるものなり。但し通常の場合に於ては擔當技術員の總括的推算を以て其進度を何%と決定す。

此進度分の査定は營業損益計算の結果に及ぼす影響大なるものあるを以て毎期末に於ける計算時に於ては、社長若しくは最高技術員必ず立會ひの上、その擔當者の査定の當否を審査決定するものとす。新に發明せられたる機械或は研究直後に於ける試作等に於ては多くの場合需要者はその構造機能等を熟知し居らざるを以て、當然供給者に於て充分なる機能引受の保證を行ふ事を必要とし、往々生ずる處の違算或は現地の狀況の不知による等の各種の原因に基因して最初の 1 回に於ては所定の効果を擧げ得ざる事あり。従てその前途に對し若干の不安を含むものはこの進度査定を幾分控目にみるを以て安全且至當とす。

② **支拂勘定進度法：**——

豫定原價中の支拂濟の比率を以て其作業の進度と看做す方法にして、即ち、

$$\text{製造進度} = \frac{\text{製造勘定支拂濟}}{\text{豫定原價}} \times 100$$

正當に査定せられたる第 1 法と精確に記帳せられたる此第 2 法とは原則としては結果に於て合致すべき筈なれども決算期中途に於ける概算假決算等に於ては往々若干の差違を生ず。工賃及材料費は毎月末に於て未拂となる場合殆んど無きものなれども外注品に於ては往々作業の進度と支拂の狀況と相伴はざることあり。作業の進捗し居るに拘はらず完成に至らざるものは未請求の場合多きを以て、此場合に於ては社内に於て一旦支拂ひたるものとして假受金の形式を取り置く事を必要とす。同様に又未だ作業に着手せざるものに對し手金又は前渡金を支給したるものは之を製造勘定より支出せずして假拂金となすことを要す。

進度分利益：——

次の算式により計算す。

$$\text{仕掛品進度分利益} = \text{現在進度} \times (\text{受註高一最近豫定原價})$$

支拂濟：——

製造勘定に於ける工作口別帳の支拂額の合計を轉記す。

製作勘定未拂：——

計算時に於けるその工作番號に屬する仕事を完了する迄に要する未拂分を査定して之を計上す。

收入支出豫算：——

その計算時より爾後 4 ケ月間の收支を記載するものにして、その各月に於ける収入の部は前々項得意先勘定の未收の部の内譯にして、支出の部の合計は前項製作勘定の未拂の額に合致す。何れもその收支の時期を推定したるものにして、この各月に於ける工作別の總合計は會社營業收支の爾後に於ける根據ある豫想にして、更に之に各月の營業費、假勘定の收支、借入金の返済、受取手形、支拂手形の決済等をその豫想月に於て記入する時は爾後 4 ケ月間に於る會社の收支全部を豫定する最も正確なる數字を得、事業經營上貸借對照表と相俟つて重要な指針となるものなり。尙この營業

總覽表に記載する範圍は完了品に於て未收或は未拂の殘存し居るもの及仕掛品の全部にして、完了品にして全部の代金を受領し、製作勘定の全額を支拂ひ終りたるものは本表に計上せず。又記入に際しては之を大別して前期完了品、今期完了品及び仕掛品の3部に分ち、各その小計を出し更にその總合計を記入するものとす。

營業費貸借關係等に屬するものは別頁として添附し、その最後に於て會社の總收支の合計を記載するを便とす。

尙本表より事業經營上必要なる次の各項を知る事を得。

(a) 手持仕事

本表得意先勘定中の注文金額の總合計なり。

通常稱ふる所の手持仕事の意味は各會社により異り、その意味稍々漠然たるものなりと雖も營業狀態盛衰の概要を知る事を得。

(b) 仕掛品

本表の得意先勘定中の注文金額の仕掛品の部に於ける合計なり。

(c) 完了品未收額

得意先勘定中の前期完了品未收金と今期完了品未收金との合計なり。

(d) 總未收金

得意先勘定中の完了、仕掛共未收金の總合計なり。この未收2項は近き將來に於ける入金を豫約せられたるものにして會社金融上往々必要とする事あり。

(e) 總製造利益率

現在會社の手持し居る仕事は製造利益率何割に當り居るやを知る事は經營上最も緊要なる事に屬す。この個々の工作番號に屬する利率は前項に述べたるが如し。今知らんと欲する所は仕事の全體を通じての總平均にして、この注文金額と豫定原價との差額の實數が間接經費を支拂ひて餘りある部分が純益となるものなるを以て、この利率は極めて重要なる事項なり。注文金額の總合計より豫定原價の總合計を減じ、注文金額を以て除したる

ものの%なり。但しこの中には完了品、仕掛品双方を含む。完了品は既済の事に屬するを以てその數字は確實なるものなれども仕掛品はその進捗の程度に依て若干の變動性あるものなるを以て更に之を2つに分ちて考ふるを良しとす。

(f) 完了品製造利益率

上記の計算を完了品の合計のみに於て計算するもの。

(g) 仕掛品製造利益率

上記の計算を仕掛品のみに於て計算するもの。

(h) 仕掛品進捗分利益

計算法は前項説明の通りなり。その總合計は計算時に於ける仕掛品の進捗分に對する利益なり。仕掛品に就ては會社の仕事高を計算するに其仕掛品の受註高とその支拂高とを計算し、兩建として貸借双方に記載する記入法と、その差額進捗分利益を一方に記載する片建の方法とあり。一般工業會社の商習慣をみるに後者の場合が大部分を占むるを以て片建として利益分のみを計上する事とせり。

(i) 製造勘定未拂

製作勘定欄の未拂の合計なり。

(j) 總手持仕事完了後に於ける會社の經濟狀態見越し

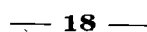
未收金總合計より未拂金總合計を差引き更に之より之を完了するに要する期間の經費及決済す可き借入金及支拂手形を差引き、その殘額を考慮に入る。然れども本計算は計算期以後に於ける受註は全部之を打切りたるものとし、支拂手形及借入金は全部之を完済としての計算なるを以て眞の實情に合致せざるものにして、實際は引續き注文を受け、之に對して收入豫定及原價の支拂高あり、又借入金、支拂手形等は會社の信用は何等の變りなく寧ろ漸次増大す可きものなるを以て、之を完済としての計算は安全に過ぎて反つて其の當を得ず。即ち本項の計算は貸借共確定し居る事項のみを以て將來を卜するものにして尙若干の變化あり得べきものなりと雖も往々前途の見込を推測するにつき有力なる根據の一助となるものなり。

營業總覽表

8. 損益計算

引受くるを以て、之を進度分計算によらざる時は各期末に於ける決算損益著しく偏倚して殆ど計算の形態を備へざるものとなる。即ち、前圖に於て

横に製作月數をとり假に4ヶ月を以て完了するものと假定し、縦に金額をとる。製造原價は取掛りの時より完了の時迄變化なし。4ヶ月の後に於て完全なる商品價値を發生し、その賣價との差額丈の製造利益金を生む。今之を進度分計算による時は途中に決算期の來りたる場合今假に2ヶ月目に決算するとすれば製造利益率はその比例分丈生じ居るものにして、この分を見越利益として決算に計上す。即ち其利潤の發生時期の實情は暫く措き製作工程の進行する日數に比例して漸進的に利潤を生むものとする假定の下に定められたる計算法なり。又之を賣上計算法による時は圖中鎖線を以て示すが如く、製作の工程中は何等の利益を計上する事なく4ヶ月の最後に於て突如として一時に全額の利益を生むものとして計算するものにして、この計算法による時はその損益は各期末著しく偏倚波瀾を生じ、其結果會社は繼續して不斷に製造作業を爲し居るに拘らず其成績は極端より極端に走るが如き計數を表はし、著しく實狀に遠ざかるものなり。



依て進度分計算法を採用す。

(2) 未収入金(未拂金)記入法

前期に於ける完了品の未収金は前期末の決算面に未収金として計上せらる。其今期に於ける入金の記入法に2種の様式あり。

(a) 未收漸減法

入金毎に未収金の回収として之を漸減す。此の場合毎月の假決算に於て貸借対照表面の未収金と營業總覽表面の前期完了品未収金とは合致す。未拂金の場合亦同じ。尙本法は本格的の記入法なれども若干繁雜なる嫌あり、實際は記入項數の比較的少き會社に於て採用せらる。

(b) 入金混記法

決算期の中に於ける貸借關係以外の營業入金は全部之を代金内入金の科目中に、又製造原價の支出は全部之を製造勘定の科目中に記入す。故に之等の内には前期完了品未収金の當期に於ける入金、同未拂金の出金も亦混記せられ居る事となる。又この法による時は貸借対照表面の未収金は一決算期間不變にして、營業總覽表面に於ける前期完了品未収金は未收殘額の實數なり。依てその差額は混入分にして決算に於ては前期分を除外するため之を差引きする事を要するものなり。この法は一種の省略法にして一決算期間の中に於ける記入法として、又記入事項の著しく多き會社に於て記入經費を節約するため屢々採用せらるる所なり。

(3) 損益計算法

製造損益はまづ完了品について之を行ひ、仕掛品はその進度分利益のみを計上す。即ち、

収入ノ部	支出ノ部
完了品賣上金	完了品製造原價
仕掛品進度分利益	前期仕掛品見越利益
雜收入	間接經費
	差引利益金

(c) 完了品賣上金

貸借対照表の代金内入金は完了品の賣上入金と仕掛品の内入金とよりなる。依てこの仕掛品内入金を控除する事を要す。又今期の完了品にして代金未收の

ものあり。即ち今期完了品未収金を加算す。前期完了品未収金の取扱方は先の未收漸減法によりて記載せられ居る場合には賣上金の計算はこの3項を以て事足ると雖も、入金混記法による場合には更に此代金内入金より前期完了品未収金の今期に於ける入金額を差引く事を要す。即ち貸借対照表面の未収金は前期完了品未収金の金額にして、總覽表面の未収金は其未收殘高に該當するを以て、この差額が代金内入金中に混記し居る額に相當す。今加算分と控除分とを^{プラスマイナス}+-を以て表はす時は完了品賣上金は次の如くなる。

$$\begin{aligned} \text{完了品賣上金} = & \left\{ \begin{array}{l} + \text{代金内入金 (貸借対照表ヨリ)} \\ - \text{仕掛品内入金 (總覽表ヨリ)} \\ + \text{今期完了品未収金 (總覽表ヨリ)} \\ - \text{前期完了品未収金 (貸借対照表ヨリ)} \\ + \text{同上未收殘高 (總覽表ヨリ)} \end{array} \right. \end{aligned}$$

尙營業利益金の外に在庫品利益を見込む場合に於て

第8表(3/4大)

第 期 自昭和 年 月 日 假決算 損益計算書 何 何 株式會社

収入之部				支出之部			
完了品賣上金				完了品製造原價			
備考(賣上利益金)							
内 詳				内 詳			
代金内入金(對)				製造勘定(對)			
仕掛品内入金(總)				仕掛品支持費(總)			
今期完了品未収金(總)				今期完了品未收金(總)			
前期完了品未収金(對)				前期完了品未收金(對)			
同上未收殘高(總)				同上未收殘高(總)			
在庫品工場利益				固定資産へ振換(型)			
				前期仕掛品見越利益			
仕掛品進度分利益(總)				前期仕掛品見越利益			
雜 收 入				營業間接經費(工場共)			
小 計				小 計			
差 引 純 損 金				差 引 純 益 金			
合 計				合 計			

決算損益計算書

収入之部				支出之部			
完了品賣上金				完了品製造原價			
仕掛品進度分利益				前期仕掛品見越利益			
				營業間接經費			
内 詳				内 詳			
第一次決算計上分				第一次決算計上分			
進度利益控額				當期社員賞與			
				期末雜費受取費			
雜 收 入				諸 銷 却			
				當 期 純 益 金			
合 計				合 計			

は之に在庫品工場利益として加算す。以上第8表收入の部の通りとす。

(d) 完了品製造原價

貸借對照表の製造勘定は又次の各項よりなる。

前期繰越仕掛品製造勘定、前期末仕掛品進捗分見越利益、今期完了品支拂額、同じく仕掛品支拂額、又混入法による場合に於ては、前期完了品未拂金の今期に於ける支拂額を含む。同様之を記號を以て表はす時は

$$\begin{aligned} \text{完了製造原價} = & \left\{ \begin{array}{l} + \text{製 造 勘 定 (貸借對照表ヨリ)} \\ - \text{仕 掛 品 支 拂 額 (總覽表ヨリ)} \\ + \text{今期完了品未拂金 (總覽表ヨリ)} \\ - \text{前期仕掛品見越利益} \\ - \text{前期完了品未拂金 (貸借對照表ヨリ)} \\ + \text{同 上 未 拂 殘 高 (總覽表ヨリ)} \end{array} \right. \end{aligned}$$

(4) 計算の完結法

収入の部に於て仕掛品進捗分利益、雜收入等を計上し、支出の部に於て前期仕掛品見越利益、營業間接經費等を加算し小計す。次に純益金或は純損金を算す。詳細第 8 表の如し。

尙期末に於ける本決算に於て製造勘定の口別に於て完了品の領收済、未收、支拂済、未拂等を各口別にした一覽表を作成す。更に要すればこの支拂済の額に於て原價計算第 1 項材料、外注品、工賃、直接雜費等に分類したる原價計算書を添附するものとす。(完)

【10 頁より續く】

起泡劑として G.N.S. No. 5. Pine Oil を、捕集劑として Gas Tar Oil, reconstructed with 6% S, 又は 50% Lobitos Diesel Oil, 50% Mineral Oil の混合油を使用する。現在では起泡劑として Flotol, 捕集劑としてザンテートを使用した。海水のみを使用し無試薬の場合 pH 8 の弱アルカリ性を有する Circuit である。屢々分散劑として Na-Silicate, Crude Pet oleum 等を使用する必要がある。海水中では Cresylic Acid はその起泡力を失ふ傾向がある、海水それ自身で相當の起泡力を有し、空氣浮選機 (McDonald or Callow Cell) で強い眞白な泡沫が數吋の深さに出来るがこの泡沫は殆んど捕集力がない。海水の浮選に慣れない職工がこの "Natural froth" に惑はされる。海水に依る浮選では明に著しく粒の荒い精鑛を生じ、濾過機を使用しないでも脱水し易い。然し乾燥に際し鹽類が強い固着劑となつて精鑛を固め易く輸送に際する Dust loss を防ぐ。

黄銅鑛の浮選に對しては明に海水を使用しても何等の困難はない。加之粗粒の精鑛を得る點及沈澱の容易なこと等の利點がある様に見受けられる。

石灰を浮選サーキットに使用すると試薬の使用量を減じ得るのみならず海水による金屬の侵蝕を一部防ぎ得る利益がある。海水の侵蝕には Admiralty brass が最もよく、High grade Copper 之に次ぎ、Mn 含有量の少

い純鐵が比較的にこれに耐へる。

海水を浮選に使用せる我國に於ける實例 我國に於ては未だ浮選用水として海水を浮選作業の實地に使用せる實例はない様に思ふが、鑛山又は選鑛場の位置が海岸にあつて而も清水を多量に浮選用水として使用し得ない様な場合に、海水を浮選用水として使用し得るや否やの浮選試験が行はれた。その報告の概要を各鑛山會社及技術員諸氏の好意により、その 2, 3 を入手する事を得た。その詳細を茲に繰返して説明することを省略して、單にその結論の概要のみをここに掲げることとした。試験せられた鑛石は含銅硫化鐵鑛 1, 鉛、亞鉛、黃鐵鑛 1 の 2 つの試験報告の結果を掲げると次の如くである。

(1) 海水を浮選用水として使用する時は何等起泡劑等の試薬を添加せずして自然に起泡すれ共捕集力を有しない。

(2) 海水を浮選用水として使用すると、浮選油の性能は多少劣るも、含銅硫化鐵の選には差支ない。

(3) 黃鐵鑛の多量を含む鉛、亞鉛鑛の優先浮選に於て亞鉛精鑛品位及採收率共に稍低下を免れない。鹽基性浮選の場合には起泡性悪く、石灰の使用量多く、第二次黃鐵鑛の回收に不適當なるも、亞鉛鑛及黃鐵鑛を共に浮選し、その浮選を再浮選して分離する方法等により、海水を使用するも優先浮選を行ひ得る。(終)

獨逸に於ける化學機械

(關西側講演及座談會)

去る6月23日大阪中央電氣俱樂部に於て、最近獨逸より歸朝せられたる住友化學工業會社技師鹽谷二郎氏より「獨逸に於ける化學機械工業の近情」なる題下に獨逸に於ける化學機械技術者養成の情況を始め、Achema を中心とする各種有益なる講演を伺ひ、終つて同會社技師長竹内亥三吉氏を加へて同問題を中心とする座談會を開催し、出席者63名に達する大盛會裡に蒸暑い初夏の講演及座談會を終つた。

出席者(略敬稱、順序不同) 鉛 市太郎 松永六二 南大路謙一 香坂要三郎 辻元謙之助 青木 友 森田徳義 (以上阪大) 龜井三郎 志方益三(以上京大) 松本 源 高松 亭 荒井 浩 杉本俊三 谷山孝次 池下守清 樫田茂一(以上大阪工試) 小山平治 中島 敏(以上堺職工學校) 佐々木寅雄(大阪工獎) 辰田 正(大阪工研) 田邊友次郎 稻村賢三(以上住友伸銅) 栗本順三(栗本鐵工) 土屋藤丸(大阪機械) 高橋良次(神戸製鋼) 磯部 助一 多田文秋 森田利光(以上大阪鐵工) 杉江重康(三菱商事) 稻田伊作(前田化學機械) 櫻井 彰(櫻井化學機械) 酒井源太郎(フィルタープレス製作所) 渡邊楨四郎(高橋鐵工所) 石原賢吉(紡機製造) 加藤 進 小栗善四郎(田中機械) 山内淑人(藤永田) 大山 章(住友機械) 米樹健治郎(川崎造船) 今川重雄(日本窒素) 田中銀次郎(堺化學) 本谷久吾(大日本セルロイド) 宮崎秀榮(再生樟腦) 柳田松田郎 明石 毅(大阪ガス) 佐久間國三郎(淺野セメント) 菊地土田三(豐年製油) 大塚清吉(東洋石油) 時實杖一 松浦 修(武長商店) 作川鐸太郎 中島 正(東洋紡科研) 木村清三(日本香料) 朝山耀雄(齋藤硫曹) 芝 時孝(第一工業製藥) 藤澤友吉(藤澤商店) 佐々木鋭爾(吉原製油) 竹内亥三吉 鹽谷二郎 郷 幸之助(住友化學) 荒木行雄 桐本 三三(上野商店) 村田清淳(香川縣醬油試驗場) 以上 63 名

松永氏 それでは只今から兼て御通知申上げました關西側の座談會を開くことに致します。豫期以上に大勢御出席になりました關係で座席變更その他準備のために大變遅くなりまして甚だ不行届の段は御容赦をお願い致します。今夕は副會長の鉛博士が出席してをられますので皆様の御賛同を得まして座長をお願いしたいと存じます。

鉛 氏 甚だ僭越でございますが御指名に預りまして座長を勤めさせて頂きます。只今松永幹事からお話がございました通り、實は私ども御出席がかう多數でないと豫期してをりましたので小さな部屋で全く圓陣を作つて座談式にお話を願ふ積りでをりましたところ、御出席の御申込が75名ございましたので、到底座談會のやうな形式の机の配列は出来ませんで席を作り變へました關係上席順も不都合の點がありまして御迷惑かと存じますが、どうかこの會が斯の如く盛會である——75名の御申込のうち只今50名御出席になつてをります——ことは我々主催者と致しましては非常に有難く、御出席の皆様へ厚く御禮申上げますと共に會の成長を喜んでをる次第であります。

本日は座談會とは申しますものの、長らくドイツに御滞在になりまして最近お歸りになりました住友化學工業會社技師鹽谷

二郎さんから「獨逸に於ける化學機械工業の近情」といふお話をまづ約一時間承りまして、その後に質問といふやうな形で座談會に入りたいと思ふのであります。たゞ一寸お斷り申上げたのは、この演題には「獨逸に於ける化學機械工業の近情」となつてをりましてこれに間違ひないのでありますけれども、時間も限定されてをりますことでもありますし、獨逸に於ける化學工業の技術者の養成といふやうなことを中心にしてこの題に最も副ふやうにお話下さるといふことでもあります。尙質問に入りましては皆様御承知の長く獨逸にをられまして最も獨逸通でをられる住友の竹内さんがをられますので御二人で質問にお答へ下さることになつてをります。尙質問と申しますものの座談會でありますから單なる御質問でなしに皆さんの御意見を十分にお述べ下さいまして質問兼意見發表といふことでこの座談會を進行致したいと存じます。それでは時間も遅れてをりますから早速まづ鹽谷さんのお話を願ふことに致しましてその後には座談會に入りたいと存じます。